

感謝の念を捧げ、老後の自愛をお祈りします。

特攻基地、比島戦末期

戦犯未決収容所

静岡県 山本春彦

私は関東大震災から二カ月も経たない大正十二年十月八日、元熊切村（現周智郡春野町）の岩田家の三男として生まれました。父は農林業で杉、檜の植林、椎茸栽培などをして生計をたてておりましたが、兄は既に現役兵として出ていました。当時農家の次、三男は都会で働く者も多かったのですが、既に戦時中でありましたので、熊切村で三名軍隊に志願せよということでした。

私はその頃、肺門リンパ線という病気で三年半、ようやく全快して間もない時でしたので、当然採用されなれぬと思っていましたし、勤務をしながらもまた病が出てはいけないと気を遣っていました。

ある日の夕方、青年学校で「この中で死んでもいい者はあるか」と言われ、私は軽く手を挙げました。「熊切で三名割り当てられている」という状態です。今思えばとんでもないことだが、まあ当時は当然だったでしょう。志願の書類は、自分で一字も書かないのに、青年学校の指導員が全部書いたのです。これではほとんど断われない。合格になるか不合格になるか分からないが、自分としては病み上がりの時だったので成り行きに任せることとなりました。

検査は隣の森町（遠州）で行われたのですが、結果は「乙種合格」となりました。試験は体格と学科でしたが、胸部はだいたい良いと医務の先生から言われていたので、自信は取り戻せました。

昭和十八年五月一日に家族や部落の人々に万歳で送られ、志願兵だけの列車で袋井駅から東海道線の藤沢で民家へ分宿しました。仲間は海兵団行きで志願兵だけでした。食事は軍からの食料を回してあったのか腹一杯、食器も海軍のものでした。軍官民一致で、民宿は一つの商売のように慣れたものでした。

五月二日入団、八月末退団の間、教育は飛行機の整備兵の基礎、陸戦隊の基礎訓練でした。座学（学科）一科目ごとに試験があり、その成績で序列が決まりました。本当に一夜漬けの教育で、その試験が終了すると次の科目に移る。毎日毎時が気を抜くことのできない厳しい教育でした。分隊長（班付士官）は兵科出だったので徹底的に陸戦訓練でも絞られるのです。

三カ月でそれぞれ希望の配属を決める。私は一、戦地、二、静岡大井航空隊としましたが、大井航空隊に入りました。八月末入隊したのは三、四名でした。航空隊は練習航空隊だったので、飛行機は単葉で射爆の予科練の養成所（通称赤トンボ）の整備の手伝いをしました。これが実地訓練です。

その時、一〇二期の練習生に決まっています、神奈川第二相模野航空隊に入りました。詰め込み教育でエンジンの構造、修理を徹底的に仕込まれました。プロペラは、プロペラで角度が変わるのだからこれも一つの科でした。全科目を一通りサラッとやって、私はエンジン担当になりました。一〇二期の同期生には上等兵

も兵長もいました。私の階級はその下の一等兵でしたから、上級者の上等兵や兵長に随分叩かれました。教員（下士官）はベテランの整備士で、この人から整備を徹底的に仕込まれました。教育中はしょっちゅう成績によって序列が決まり、その中から恩賜の銀時計の人も出ました。徹底した軍隊式の学校で、昼夜の別なく仕込まれました。

昭和十九年五月初旬、ここを卒業し、一時横須賀へ行き、引き返して相模野勤務を一カ月ぐらいしていました。六月半ば、千トンぐらいの上陸用舟艇（海岸の砂浜を上げるような船）に乗って台湾高雄泊マニラ（フィリピンのミンダナオのアバリ）ハルマヘラ島、カウ基地とワシレ基地へ行く。ここは零戦の基地でありました。

いよいよ我々は南方の最前線です。その時は特攻機は飛ばしません。二カ月後、ミンダナオのデニス基地で特攻機は発進しました。零戦、一式陸攻機です。その時、私は「俺は整備兵だ」という気がしました。特攻隊員は「死に行く飛行機」に乗る。パラシュートの

布で作ったマフラーを首に巻いて、それが二、三メートル尾を引いて行く。若い私にとって、格好良く見えるが死に行くのです。我々はこの隊員を帽子を振って送りました。その時の心境は、この現場にいた者でなければ分からない、悲壮感で胸がいっぱいでした。

あの人たちは二度とこの飛行場に帰って来られないのだと。

府中にいたとき、整備士であった私たちに「お前は優秀だからもつたいたい（整備士などやっていては）、乗る方になれ」と言われました。私はこれを断る言葉を考えていました。「整備士ではもつたいたい」そこで、「整備士では恐れ多くも天皇陛下の御為になれぬのか」と言うと言こうは困っていました。

しかし、私は真剣に考えました。しかし、もし乗っていれば今は死んでいました。誘う人は、我々の試験のテスト結果を見て誘いに来る。兵長とか、下士官とかが代わる代わるに来ました。入れ代わり立ち代わり、しつこく来る。私もあの時、命が惜しかったわけではないが、最初から整備兵を志願したのだから、整備で

国のために尽くそうと思っていました。第二相模航空隊でも、しつこく言ってきたと他の人から聞きました。特攻は飛んで行って、ぶつかるだけの訓練が主でした。

ミンダナオのデゴス基地での整備のポイントは古参兵や下士官がやり、我々兵隊は言われた工具を下から投げてやる。投げ方が悪いと怒られる。掌へ工具を載せて投げると、上では後手で受け取るので、投げるのにも結構練習をしました。傷付いて帰って来る飛行機も相当ありましたので整備も大変でした。

次の任地へは民間の船で、デゴスからアパリ経由でマニラへ行きました。そこにいるうち、マニラの空が見えなくなるくらいグラマン機が来襲しました。湾内の船がやられて、海に兵隊が飛び込むと重油で海の水が燃えている。人間の「てんぷら」ができる。我々は防空隊から見えていた二日間、さながら人間がてんぷらのように無数に浮いている。あんな悲惨な光景はありませんでした。

その日、零戦二〇〇機は空襲回避をしていった。グ

ラマンが去って行った後、また帰って来ました。飛行機は温存していましたが、マニラでは飛行機はやられませんでした。空襲は十九年八月十八、十九日でした。

その後、北ルソンの派遣隊（ラオアグ中継基地）へ行きました。派遣隊の鈴木少尉は双眼鏡で見ているうち、敵が近くからバリバリ撃ってきました。少尉は「味方が間違つて撃っているのかもしれない」というので「撃つな！」と言つたのですが、その直後撃たれて即死してしまいました。

陸軍（近藤隊）の整備も我々がやりました。近藤隊長は中日ドラゴンズについて解説者をやっていた人でした。我々は鈴木少尉の遺体を収容に行きましたが、既にゲリラは引き揚げて行き、我々はラオアグの民家に宿泊をしていました。

次に陸軍の部隊と合流しました。特設輸送船が座礁し、その隊長佐藤少佐が一個大隊を編制しました。その後海軍部隊を全部集め、四個中隊で一個大隊の佐藤部隊が臨時に編制されました。そして、第十九師団

（虎部隊）松原大佐の指揮に入りました。その後荒木兵団の指揮下に入り南下して行きました。

最後はバギオを目指したと思いますが、その後トツカン地区に入り、南西方面艦隊司令部の指揮下に入り目的地へ辿り着きました。無線が台湾や内地と交信していたので終戦は直ぐ分かりました。その間、食料は自分で調達しました。現地人の作った物を取ったり、蛙でも草でも食べられる物を食べました。ネズミは御馳走でした。

私は佐藤少佐の従兵、伝令だったので、部隊長には自分で食わなくても食べさせました。隊長がマラリアとなり、陸軍の荒木兵団の見習士官の打った注射で臀部が腐つたようになり、歩行できなくなつたため、台湾の工員に隊長を担がせ、米軍の赤十字の車に乗せてもらえたので、そこで隊長と別れました。

その後、私は単独行動ができるようになり、武装解除されキャンプに入りました。マニラの収容所まではバギオからトロツコ貨車にギューギューに詰められ、その中の何人が死ぬと、「しらみ」がゾロゾロと這つ

て来るのが見える。しかし、座つたら動きがとれず、死人や便はそのままです。

トロツコ輸送、こういうのが地獄かと思いました。

収容所へ来てから米兵が死骸を片付けたのですが、しらみは払つてもまた戻ってきます。トロツコの中では三人くらい死んだのですが、トロツコに乗ったとき携帯口糧一個をもらっただけ、水も無し、食物も無し、輸送は幾晩か掛かりました。腹は空き、喉は渇く、こんなことなら山の方が良かったと思ひました。自由がきいたから、自分で食べ物を捜したり、その方が幸せと思ひました。

収容所に入ると部隊はバラバラ、陸軍も海軍もない、同じ部隊の者もない。いつの日か内地へ帰してもらえるだろうとはかない思ひだけ、まさか米兵に殺されることはなからうと思ひました。

しかし、そのうち戦犯容疑者捜しが始まりました。私は首実験を四回くらいやられました。「こいつがやつた」と言われれば絶対逃げられません。絞首刑になる時でも言い訳は聞かれません。「一つの罪でやられ

ても、多くの罪でやられるのも死ぬのは一つだ」と、どんどん処刑されていきました。

容疑者として首実験される時、オロオロ、ソワソワしていると返つて疑われて戦犯者とされてしまう。毎週金曜日の夜、絞首刑が執行される。「四二番の作業NO」は墓場作業。絞首刑者や、収容所で病死した者も、大きな穴を掘りその中に放り込まれる。命令される時は、幅、深さの寸法を言われて穴を掘られれる。収容所勤務をした私は「アメリカ人は人道主義」といつていても信じていません。

処刑台から死体をトラックに山積みして運んで来ます。先程申したように、その数だけ入る大きさの穴を掘らせてある。その穴の中に投げ込むのです。その作業は前に申した、日本人墓場用NO四二に作業が命ぜられ、夜中に「四二番作業員の方、本部前に集合してください」と女性の声で呼ぶ。合図の「ビー」が鳴ると暗い気持ちになります。

埋められた穴の上に、白いペンキの樺杭が建てられる。その数は数えることができないくらいです。私ら

が戦後、戦跡訪問に行ったとき捜したのですが、そこは新しい街になっていました。マキンソン山というのがあり、それを目当てに捜しましたが分かりませんでした。何人の死体でも穴は一つでした。

山下奉文大将が処刑されたときは、大将の肖像（襖大）を掲げ、全員が食料のパンを山と積んで捧げましたが、米軍は黙っていました。大将は「問答無用」と処刑されました。

我々戦犯容疑者の尋問のことを話しましょう。終戦までの私の足どり、行動を尋ねられます。前回と違ったことを言うと駄目、嘘を言ったことになる。ですから真剣でした。せっかく生き残ったのだから、尋問者は二世、三世の日本人で、静かに物腰柔らかに話すのです。しかも、毎回人が代わるのです。

ちよつとの違いもなく、尋問の度に同じことを話すのは大変です。紙切れ一枚、鉛筆一本もなく一言一句間違いない話す。本当に命がけて、何が原因で戦犯になったか分からない、何で未決収容所に入ったのか分からないのです。今は笑って喋っていますが、そ

の時は真剣で、やっと戦死しなかったのに、ここで殺されるのではと思いました。

私も三回、四回、五回目となると慣れて、一言一句違わず喋れるようになりました。尋問者は五回目も違う尉官の将校で、品の良い男で、言葉も鄭重、これにうっかり騙されてはいけないと、顔で笑って心で身構えていました。戦争が終わって殺されてはならぬと思いました。

ようやく家に帰ってから、度々夢の中で「呼び戻し」のを見ました。身に覚えのある人は家には帰らず、他へ行ってしまった人があったことです。私が帰ったのは昭和二十一年だったと記憶しています。が、何しろ、未決の収容所に放り込まれ、二、三カ所を点々と動かされましたので、復員して直ぐに結婚したのが昭和二十二年三月ですから、南方としては随分遅かったわけです。今思い出しても未決の時は戦争末期の比島戦線での生死をさまよった時より不安でした。終わりに、終戦後、別れた佐藤少佐との再会について話をします。少佐は帰国後、奥さんや息子さんや娘

さんに「静岡の山本さんのお陰で帰って来られた」と言っておられたといひます。私も戦地では伝令をしていて、自分の父親のような気がしていました。娘さんなどは、私を「恩人さん、恩人さん」と呼んでいました。少佐は帰還後、東京の海員組合かの理事さんをしていて、八十六歳で亡くなったのですが、戦後、戦友会で「岩田、岩田」と親しみを呼んでくれていましたし、家へ来ていただいて鮎釣りをして楽しんでくれました。亡くなった今でも親のような気がしていません。

遙かシベリアの空の下で

大阪府 久郷 直

中学を卒業後、三越に就職し、召集されるまで十七年ほど勤めていました。家庭は両親と男三人、女一人の四人兄弟でした。私は末っ子です。

二十歳の時に徴兵検査を受けましたが、丙種でした。

これで軍隊に勤めることはないと安心して三越に勤めていました。しかし、満州事変、支那事変、そしてとうとう亜細亜・太平洋戦争に突入してしまいました。それにつれ、五体満足なら年齢の区別なく根こそぎ動員されるか、軍需工場へ徴用です。

一方、日常生活の方も主食の米を始め衣料に至るまで切符制度になりました。三越でも売る物がなく、いっつ店が閉鎖になるか陰で話していました。

知人の薦めもあり、ここに勤務していたら召集もないだろうと産業報国会に勤めました。約一年もいたでしようか。

昭和十八年十月に召集令状がきました。その時は三十三歳で、家には妻と六歳と五歳の男の子がおり、大阪市内の江戸堀に住んでいました。両親はその時既に亡くなっておりました。第三連隊にでも入るかと思ったら、東本願寺に集合とのことでした。命令の日時までに行ったら二百人ほどの人が集まっていました。

そこで人名、人員の確認があつた後、冬服一式が支給されました。落ち着いた所でよく見ると三十歳から